

平成 28 年度 入学試験問題

国 語

(第 4 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人間はだれでも、小学校から中学校へ、高等学校から大学へ、新入社員から社長へ、年をとってゆくものです。それと同じように、本の読み方も、おのずからそれが積み重ねになるように読まれてゆかなければおかしい。積み重ねというのは、前に読んだ本の知識が、その次の本を読むために役立ち、また、前に本を読んだ経験が、その次の本の読み方を、あるいははやくし、あるいは深くし、あるいは ユウエキ^aにするために役立ってゆくということです。比喩的^{ひゆてき}にいえば、人の成長にともなって、読書生活にも成長のあるのが自然の姿だろうと思います。もし実生活の成長で人が成長し、読書生活のなかで成長が止まるとすれば、その食い違い^{ちがひ}は、ちょうど、学生時代の服が卒業後に役に立たなくなるように、読書生活がどこかで止まってしまったに違いありません。その食い違いがあまり大きければ、ある場合は取りかえしがつかなくなり、本を読むことをやめるといふ結果にもなりかねないでしょう。そういう例が実際にならないこともありません。

大学のときに、たとえば『世界』を読み、新入社員のときに『週刊朝日』を読み、勤続十年におよんで、もはや週刊誌を読むことさえ面倒^{めんどう}くさくなるという人があるとすれば、そういう人の本の読み方には、そもそもはじめからなにかおかしいところがあつて、積み重ねが行なわれていなかったということになるでしょう。読書生活での積み重ねは、もちろん言葉の問題だけではなくありません。① I、言葉の問題はその第一歩です。なぜなら、読書生活での言葉は、いわば大工道具のようなもので、切れない道具でよい仕事のできるはずはありません。積み重ねは、まず第一に、言葉をだんだん自分のものにしてゆくという形で行なわれるので、その次が、経験の積み重ねということになるはずです。

ある種の本のなかには、言葉または [※] 概念^{がいねん}の組み合わせだけからできていて、ほとんど人間生活と関係のないものがあります。たとえば、[※] 幾何学^{きかがく}の教科書はその例になるでしょう。そういう場合には、概念の論理的な組み合わせそのものが、いわばその内容にほかならないのですから、一つ一つの概念を正確に理解し、論理を正確にたどれば、原則として、そのすべてがわかるはずですが。しかし、一般^{いっぱん}に大部分の本は、それほど純粋^{じゆんすい}な概念の構成ではなくて、絶えず経験とのあいだに密接なつながりがあります。その経験の重みのもっとも大きい、幾何学とは反対^{さかたん}の極端^{きょくたん}にある本には、たとえば、芸術作品についての芸術家自身や鑑賞者^{かんしょうしや}の感想というようなものがあるでしょう。その場合には、言葉の意味を知っているだけでは、ほとんどなんにもわからないということになります。一つの文章から他の文章へ移るのは、多かれ少なかれ、純粋に A ^{ちつじよ}な秩序にしたがつてではなく、いわば経験の秩序にしたがつているからです。① 文句の意味はわかるけれども、つまるところ腑^ぶに落ちない」といふところがあるのは、そういう本についてのことです。

旅行案内記というものがあります。これは読んで、わかりにくいものではない。だれでも読みさえすれば、文句の意味はわかります。しかし私は京都・奈良^{なら}へ行くまで、案内記を読み通すこ

とができませんでした。唐招提寺はいつできあがったとか、鑑真和尚がそこにいたとか、——そういうことは、あの講堂の屋根の反り、木彫の仏の衣のひだ、白い庭土を照らす真昼の太陽を見たあとでは、かぎりなくおもしろい。しかし見る前にはただ B 乾燥で、とても読みつづけることのできないものでした。また私は旧制高等学校のときに歌舞伎座の立見席に通うと同時に、黙阿弥の名作に読みふけたことを思いだします。舞台への興味があるから、芝居の脚本を読むことができるので、芝居をみないうちは脚本を読むこともできないでしょう。その後、私はフランス文学を読み始めましたが、芝居は読まなかった。現代ゲキから古典ゲキまでさかのぼって、フランスの芝居を読むようになったのは、パリでゲキジョウに通ってからです。いや、文学だけにかぎりません。医学部の学生だったとき、解剖学教科書でさえも、実習でほんとうの人骨を見ながら参照すると、すべての活字が生きてくる。実習しなかったところを教科書だけで理解し、覚えようとする、じつにむずかしく、じつに退屈でした。どうも「いわく言いがたし」というところが、たいていの本にはあるようです。人情の機微にかぎらず、人骨の機微においてさえそうなのだから、こちらの経験に通じる本をよく読み、通じない本を無視するほかテがないかと思われます。

たとえば、小林秀雄さん（一九〇二—八三）の『鉄齋』^{てつさい}についての一書を読んで、よくわかる人もあり、よくわからない人もあるでしょう。むずかしいと思う人もあり、やさしいと思う人もあります。どうして人によってそういうわかり方の違い、むずかしさの違いが出てくるかといえば、それは、小林さんが使っている言葉の定義をどの程度まで正確に知っているかということではなくて、読者がどの程度に「鉄齋」を見ているか、II、読者の側での絵を見るという経験の有無、あるいはその深淺によるでしょう。これは幾何学教科書の場合とよほど違った事情です。^③初等幾何学教科書がむずかしい、またはやさしいというのと、小林さんの『鉄齋』^{てつさい}がやさしい、むずかしいというのとは、意味がかなり違って思うように思われます。小林さんの『鉄齋』の場合は、読者が一つの文句を読んで、その表現の意味がいちおうわかったただけでは、じつはなんにもわかっていないということになる。（富岡鉄齋、南画家、近代日本画壇の巨匠、一八三六—一九二四）

ほんとうにわかるといふことは、その文章を読んだ単におもしろがるというのではなく、なぜ小林さんが、そこでそういうことを言っているのか、納得がゆくということでしょう。

「なぜこの定理から、この系が出てくるか」——それは論理の問題であり、論理の問題は言葉で言い表わすことができます。

「なぜこの第一印象のあとに、この感想が出てくるか」——それは論理の問題よりも、著者の経験の質の問題です。

経験の質は、けっして言葉によって十分に表わすことができません。想像するほかはない。想像することができなければ、二つの文章はつながってこないでしょう。

読者は読みながら、文章を通して、そのハイケイに、うしろ側からその文章を支えている著

者の経験を感じなければなりません。しかし、そういうことを感じるためには、読者自身が著者の経験とほとんど同じ種類の経験をあらかじめ持つていなければなりません。ほんとうのむずかしさは、そこにあります。そのむずかしさを乗りこえる道は、ただ一つ、その絵を見て、同じ種類の経験を自分のものにするだけです。

別な言葉でいえば、幾何学教科書は「[※]理性が万人に等しく分かち与えられている」かぎりですべての人に向けられたものです。だれでも落ちついて十分に考え、十分に練習すれば、残るくまなく、そのすべてがわかるはずのものでしょうか。しかし、小林秀雄さんの『鉄斎』は万人に向けられたものではなく、「鉄斎」を見たことのある人、**Ⅲ**、少なくとも小林さんが「鉄斎」を見たときの経験と同じような種類の経験を、ほかの画家を通じて持ったことのある人だけに向けて書かれたものです。だれにもわかるものではない。本来、わからない人があつて当然のものです。読者の立場からいえば、小林さんの『鉄斎』のようなものは、もし「鉄斎」を一度も見たことがなければ、はじめから読まないほうがいいだろうと思います。(もつとも、これは比喩的に言っているので、たとえ「鉄斎」を見たことがなくても、たとえば大雅において、セザンヌにおいて、そのほか多くの画家において、ある種の絵を見ることの深い体験を繰り返してきた人なら、かならずしも「鉄斎」そのものを見たことがなくてもよいのかもしれない。詳しくいえば、小林さんの文章に関するかぎり、問題は「鉄斎」そのものではなく「鉄斎」を前にした小林さんの経験であり、その経験の質が読者の経験の質と通じあうかどうかということです。)

要するに^④ 見たことのない絵に関する本を読むのは、その本がむずかしいか、むずかしくないかというより、原則としては不可能なことでしょう。同じように、聞いたことのない音楽について本を読んでみても、純粹に技術的な意味以外にはたいして意味がないでしょう。しかし逆に、十分に「鉄斎」を見たことのある人にとっては、小林さんの文章は少しもむずかしくないし、おそらく、これほど自然に、これほど容易に納得のゆくものはないかもしれません。小林さんが『モーツァルト』を書いたときに、多くの作曲家たちは、はじめて読んだ小林さんの文章をちつともむずかしいとは思わなかったようです。しかし、小林さんの文芸評論に慣れていた文学青年たちは、ほとんどひとり残らず、あの文章をむずかしいと思ったことでしょう。むずかしいか、むずかしくないかは、まさに文章の側の^dセキニンではなく、読者の側でモーツァルトを聞いたことがあったかどうか、いや、だれでも聞いていたにしても、どの程度に聞いたことがあったかということに帰着する。

(加藤周一『読書術』より)

※概念……ある事物に対する大まかな意味内容のこと。

※幾何学……図形および空間の性質について研究する数学の一部門。

※機微……表面からは知りにくい微妙な心の動きや物事のおもむき。

※理性……感覺的能力に対して、概念的に思考する能力。

問1 — 線 a ~ d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん I III にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|----|-----|-----|------|
| 1 | I | しかし | II | そして | III | さらに |
| 2 | I | しかし | II | つまり | III | あるいは |
| 3 | I | まして | II | つまり | III | さらに |
| 4 | I | まして | II | そして | III | あるいは |

問3 空らん A にあてはまることばを文中から漢字二字でぬき出しなさい。また、空らん B に漢字二字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

問4 — 線①「文句の意味はわかるけれども、つまるところ腑に落ちない」とありますが、どのようなものを読んだときにこのようなことが起こりますか。その具体例として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の行き慣れた場所に関する旅行案内記。
- 2 最近勉強し始めた初等幾何学に関する教科書。
- 3 大好きな映画監督かんとくの生涯しょうがいについて書かれた本。
- 4 まだ見たことのない舞台について批評した文章。

問5 — 線②「すべての活字が生きてくる」とありますが、「活字が生きてくる」ことをあらわした具体例として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 毎日、学校で文章問題を解いていたことで、文章の構成のしかたを把握はあくすることができた。
- 2 政治に関する新聞記事を読んでいたことで、ニュースでの政治家の話を理解することができた。
- 3 梅についての詩を読んだ後、実際にその香りをかいだことで、詩の内容を鮮明せんめいにイメージできた。
- 4 小学校の運動会に参加したことで、感想文を書く際に運動会の思い出を書くことができた。



(問題は次のページに続く)



② 次の文章は、昭和四十年代の北海道に住む小学校四年生のチヅルを主人公とした物語の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「あたし、こんど、生徒会の書記に立候補することになったよ」

とおねえちゃんの歌子がいい出したのは、夏休みがおわり、学校が始まってすぐのことだった。お盆ぼんがおわると同時に、みじかい夏休みもおわってしまうのだが、チヅルはまだ夏休みボケで、学校にいつてもボーッとしてることが多かったから、歌子が書記に立候補すると聞いて、(中学校は、休みがおわったらすぐに選挙なんかするのか。いそがしいなア)とびつくりしてしまった。

「そうか。書記か。そういうのは、一年生が出ていいのかい」

オトーサンが嬉うれしそうにいい、ご飯をよそっていた母の清子も、

「一年生のうちから、あんまり目立つことすると、まずいんじゃないの」

と面倒臭めんどうくさそうにいいながら、顔はすっきり、Aと笑っているのだった。

そういうのは、もうまったく、①歌子が小学校の卒業式で答辞を読むことになったときとおなじ態度だった。

「あしたから、推薦人すいせんじんや選挙対策本部の人たち、ウチに集まることになったから」

と歌子はなんでもないことのようにいい、とたんにチヅルはわくわくした。

選挙タイサク本部というのがいかにも本式の感じがして、やっぱり中学校はちがうとすっきり感心させられてしまった。

翌日、チヅルは掃除当番をおえるなり、家にとんで帰った。

いつものようにハイシャ車庫や材木置き場で遊ぶどころではなくて、なんとしても選挙タイサク本部というのを見てみたいのだった。

家に帰ってみると、歌子のほうが先に帰ってきていた。

二階の部屋を掃除しているらしく、何度も階段を上りおりしては、忙いそがしそうにしている、チヅルなんか目に入っていないようだった。

なんとか歌子の興味をひきたくて、茶の間のソファに寝ねそべったり、でんぐり返りをしたり、逆立ちをしたりしてもてんでダメで、そのうち歌子がカルピスをつくり出したので、チヅルは思おもいあまって、台所と茶の間をしきるガラス引き戸によりかかって、

「おねえちゃん、チヅルのもつくって」

と甘あまったれた声でいった。

カルピスが欲ほしいのはほんとだったが、それよりも歌子にかまってほしいのだった。

「なに、ほしいの？ 自分でつくんなさいよ。あたし、忙しいんだから」

歌子はあっさりといって、お盆にカルピスのはいったコップをのつけて二階にいつてしまった。悔くやしくてブスふくれていると、ふと台所の茶ダンスの中に、うす焼きセンベイがお菓子鉢かしばちには

いつているのが見えた。

いつもだったら、食べていいといわれてないお菓子は食べないのだけれど、なんとなく、おもしろくない気分だったので、チヅルは思いきってガラス戸をあけて、うす焼きセンベイを五、六枚つかんで、やけっぱちのようにぼりぼりと食べた。

二階からおりてきた歌子は、茶ダンスの前にすわりこんでセンベイを食べているチヅルを見て、「チヅル、あたしが買ってきたお菓子、かってに食べちゃダメじゃない！」とどなった。

「きてくれるみんなのために買ったのに。お母さんにいいつけるよ」

歌子はうわずった声でいって、チヅルを押しつけて、茶ダンスの中のお菓子鉢を取りだし、さつさと二階にもついでいこうとする。

階段を五、六段のぼったところで、

「チヅル、外に遊びにいったいでよ。友だちがきても、浮かれあがって、話に入ってきたらダメだよ。みんな、だいたいな用事でくるんだから」

B といつて駆けあがっていった。

② チヅルはぼかんと見上げていたが、ふいに目じりに涙が浮かんできた。

(おねえちゃんは、チヅルより選挙のほうがいじなんだ)

と思うと、熱いお湯をのんだように、喉から胸にかけてのあたりが、カッと焼けるようだった。

(中略)

歌子の友だちがきたときも、チヅルはソファに寝そべったままでいて、背を向けていた。友だちは四、五人で、ぺちャぺちャしゃべりながら茶の間をぬけて、二階に上がっていった。

「一年で立候補するの、ウチの植野と、四組の桑田だけだからさ。男子はたいてい二年生のほうが票とるから。植野のほうが有利だぞ」

という男子の声もして、チヅルは寝たふりをしていたにもかかわらず、あやうく寝返りを打って、のぞき見をするところだった。

立候補するのがおねえちゃん、選挙タイサク本部に男子がいるというのがチヅルにはびっくりもので、それだけ、おねえちゃんがエライのかもしれないが、いつもだったら得意に思うそんなことも、今日ばかりは腹が立ってきてしよがなかった。

けれど、腹は立つのだけれども、なにを話しているのかが、やっぱり気になって、チヅルは歯をくいしばって肩で息をしながら、こっそりと階段をのぼっていった。

階段をのぼりきったどんづまりに、障子戸があつて、その向こうからは楽しげな笑い声がきこえてきた。

選挙タイサク本部のわりに、みんながしゃべっているのは普通のこと、

「こんど、テープレコーダー買ってもらうんだ、おれ。英語の勉強だつていったら、親が買ってくれるってさ」

「ねえねえ、あれ、ほんとに声がおんなじなの？」

「うっちゃん、このプレーヤー使えるの？ ソノシート持ってきてるんだけど、聞かない？」

といったようなことを、笑いながらいつているのだった。

そのうち、だれかがチヅルのことをしゃべってくれないかと耳をすませてみたが、だれも、ソファで依怙地（ア）いこじになつて寝ていたチヅルには気がつかなかつたようので、チヅルはますます悔しくなり、足音をしのばせて階段をおりた。

笑い声があんまり大きいので、

（いったい、何人きてるんだ。あたしん家ちなのに）

と、や（イ）にわに腹が立つてきて、玄関げんかんにいつてみると、靴くつは五人分あつて、男子の靴はふたり分ぶんだつた。

その五人分の靴を見ているうちに、たまらなく憎にくたらしくなつてきた。おねえちゃんもおねえちゃんの友だちも、中学生だと思つていばつていて、小学生のチヅルをバカちがにしているに違ちがないと思えてくるのだった。

チヅルはぎゅつと歯をくいしばつてから、五人の靴をそれぞれ、靴箱や、外の石炭小屋や裏口に運んで隠かくしてしまつた。

そうして外に出て、自転車で学校をめざした。カヨコかミユキを誘さそつて遊んでもよかつたのだけれど、なぜか、人と遊ぶ気にはなれずに、ひとりでいたいような気がしたのだった。

学校のグラウンドはもうひっそりとしていて、教室の窓もぜんぶ閉まり、生徒はみんな帰つたようだった。

チヅルはブランコに乗つたり、百葉箱をあけて温度計を見たり、川つぶちをたがやしてイモやナスビを植えてある生徒菜園のほうに降りていつて、葉っぱを点検したりして時間をつぶした。

だんだん日が落ちてきて、グラウンドも校舎もしんと静まり、人の気配というものがなくなつていた。

動いていないとこわいので、チヅルはもう一度ブランコにのり、勢いをつけてこいでいたが、そのうち、ふいにグラウンドのはしっこにある外灯に明りがついた。

外灯に明りがつくのは、六時すぎに違いなく、六時すぎといえは清子が帰つてくる時間で、これ以上、家に帰るのが遅おそれると叱しかられてしまうので、チヅルはC、また自転車をこいで家に帰つた。

もう、悔しい気分はすっかり消えて、歌子が怒おどつていいるのではないかと、そればかりが気になつていた。

家に帰つてみると、電気がついておらず、まだ清子も帰っていないようで、それはホツとしたが、歌子もいないようで、わけがわからなかつた。

電気をつけて、ぼんやりと茶の間のソファにすわっていると、カタンと物音がして、二階から歌子がおりてきた。歌子の目は真っ赤で、今まで泣いていたようだった。

てつきり叱られると思つて身構えていたチヅルはびっくりして、上目づかに歌子を睨んでいると、

「チヅル、折田くんの靴、どこにやったのさ。折田くんのだけ見つからなくて、折田くん、上靴はいて帰ったんだよ」

というなり、歌子は茶の間にすわりこんで、わっと泣きだしてしまった。

チヅルはあつけにとられてしまったが、すぐに我にかえて、あわてて家をとびだし、裏の畑のトマトの木の下のつっこんであった男子の運動靴をひっぱりだした。

内心では、やっぱり、ここのは見つからなかったかと得意な気持ちも少しはあったが、それよりも歌子が泣いているのが驚きで、とてもものに、ザマアミロとは思えなくなってしまった。歌子が泣いているのをみるのは、チヅルは初めてだったのだ。

「おねえちゃん、これ……」

まだすすり泣いている歌子に、Dと靴をさしだすと、歌子は何度も手の甲で頬をこすつてから、出窓においてある電話機の受話器をとつた。

メモもなにも見ずに、歌子はダイヤルをまわして、どこかに電話をかけた。

「折田くん、うん、あたし、植野。靴みつかったから。明日、学校にもつてくから。うん。他の靴、あるの？ うん。ごめんね」

歌子は何度も何度もごめんねといい、最後には涙声になって、電話のむこうの折田くんにだめられていたようだった。

チヅルはふと、月に一度くらい電話をかけてきていたのは、この折田くんではないかという気がしてきた。

今までは、友だちが電話をかけてくるというゼータクにびっくりして、まさか相手が男子だとは想像もしていなくて、当然、クラスの女子だろうと思ひこんでいたのだけれど、この時ふいに、きつと、電話は折田くんに違いないと思えてきたのだった。

④「おねえちゃん、おかあさんにいってもいいよ」

歌子が電話をきつてから、謝るつもりでさういうと、

「いいよ、もう」

歌子は怒っているふうでもなく、ただ気が抜けたようにいって、のっそりと二階に上がっていった。ただもう、折田くんの靴がみつかったことにホッとして、ほかのことはなにも考えられないみたいだった。

今日は、歌子がお米をとぐ当番だったのだが、台所の流し場をみると、お米がといでなかった。チヅルはおわびのつもりで、歌子の代わりにとぐことにして、米櫃からお米を三合もってきて、シャッシュッと慣れた手つきでお米をときながら、ふと、

(おねえちゃんは、折田くんが好きなのかもしれない。チヅルよりも、好きなのかな) と思った。

そのとたん、どうしようもない淋しさがどうつと風のように押しよせてきて、チヅルはわけもなく大声をあげたくなった。

そんな荒々しい気持ちは初めてで、胸が苦しくなって、涙が浮かんでくるほどだった。

(おねえちゃんなんか、きらいだ。折田もきらいだ！)

⑤ チヅルは函をくいしばり、足を踏んばって、いつまでもいつまでも力をこめて、お米をとき続けた。

(氷室冴子『いもうと物語』より)

問1 空らん A D には、「そわそわ」「どきどき」のようなくり返しことばが入ります。

次の中からひらがな二字ずつを選んで組み合わせ、それぞれに入ることばを四字で答えなさい。ただし、左のひらがなはすべて使うものとします。

お き こ し ず に び ぶ

問2 ~~~~~線(ア)~(ウ)のここでの意味として最もふさわしいものを後から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

(ア) 依怙地

- 1 がまん強くものごとをやりとおすようす。
- 2 つまらないことに意地を張りとおすようす。
- 3 なにごとも腹をたててしまいがちなようす。
- 4 勝手に決定したことをおしとおしがちなようす。

(イ) やにわに

- 1 だんだんに。
- 2 たちどころに。
- 3 ぶつきらぼうに。
- 4 わけもわからずに。

(ウ) なだめ(る)

- 1 力強くはげまして断念させる。
- 2 軽口を言っつて気分を変えさせる。
- 3 気持ちをなごませようととりなす。
- 4 あやまちを大目に見てあげてゆるす。

問3 ——線①「歌子が小学校の卒業式で答辞を読むことになったときとおなじ態度」とありますが、この「態度」から父と母のどのような気持ちが読み取れますか。それと同じ気持ちを表す漢字二字のことばを文中からぬき出しなさい。

問4 ——線②「チヅルはぼかんと見上げていたが、ふいに目じりに涙が浮かんできた」とありますが、ここでのチヅルの気持ちの説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 楽しみにしていた選挙タイサク本部の会合を見ることが絶望的になった無念さだけでなく、自分にいつも優しい姉がわざと冷たい態度に出てくることにくやしさを感じた。
- 2 姉への失望からお菓子を食べてしまったことがわかってもらえないもどかしさのみならず、自分よりも友だちのほうを大切にする姉の態度に悲しいほどのうらみを感じた。
- 3 センペイを食べたことへのしおきとして自分を追い出そうとする姉へのにくしみとともに、自分一人がなかまに入れてもらえないことにふと気づいてさびしさをおぼえた。
- 4 いろいろと姉の気をひこうとしたものの気持ちをわかってもらえなかったくやしさに加え、自分をじゃまものにするような思いもよらない姉のことばに悲しみをおぼえた。

問5 ——線③「おねえちゃんもおねえちゃんの友だちも、中学生だと思っていばつていて、小学生のチヅルをバカにしているに違いない」とありますが、チヅルがこのように感じたのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 姉や友だちが自分に気づかないふりをしたうえ、意図的に自分の話題をさげていることに気づいたから。
- 2 五人の中学生による楽しそうな集まりに、小学生であるという理由で自分が入れてもらえなかったから。
- 3 自分より大きな中学生が男子をふくめて多く家に来たため、自分が部屋に入れないことがわかったから。
- 4 選挙のための集まりというのは、小学生である自分を仲間はずれにする口実であることに気づいたから。

問6 ——線④「おねえちゃん、おかあさんについてもいいよ」とありますが、チヅルはどのような気持ちからこのようなことを言ったのですか。それを表したことばを文中から三字でぬき出しなさい。

(問題は次のページに続く)



3 次 の 詩 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え な さ い 。

自 分 の 感 受 性 く ら い

ば さ ば さ に 乾 い て ゆ く 心 を
ひ と の せ い に は す る な
み ず か ら 水 や り を 忘 て お い て

気 難 し く な っ て き た の を
友 人 の せ い に は す る な
し な や か さ を 失 っ た の は ど ち ら な の か

苛 立 つ の を
近 親 の せ い に は す る な
な に も か も 下 手 だ っ た の は わ た く し

② 初 心 消 え か か る の を
暮 し の せ い に は す る な
そ も そ も が ひ よ わ な 志 に す ぎ な か っ た

駄 目 な こ と の 一 切 を
時 代 の せ い に は す る な
わ ず か に 光 る 尊 厳 の 放 棄

③ 自 分 の 感 受 性 く ら い
自 分 で 守 れ
ば か も の よ

(茨木のり子『自分の感受性くらい』より)

問1 この詩は六つの連からなっています。構成面から二つに分けるとすると後半は第何連からですか。漢数字で答えなさい。

問2 ——線①「水やり」とありますが、これは具体的にはどのようなことをすることですか。ふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 好きな女性と恋愛をする。
- 2 映画を見て主人公の姿に涙する。
- 3 山へ紅葉狩りに行って一句詠む。
- 4 試験で点数を取るために暗記をする。

問3 ——線②「初心消えかかる」とありますが、どうしてこうなったと考えられますか。

「A (誰) の B のため」という形にあうよう、空らん A ・ B にあてはまることばをそれぞれ詩の中からぬき出して答えなさい。

問4 この詩で使用されていない表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 擬態語
- 2 擬人法
- 3 比喩
- 4 体言止め
- 5 呼びかけ

問5 ——線③「自分の感受性」とありますが、この詩ではどのような意味でこの言葉を使っていきますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分が外の世界に触れる時の心のありよう。
- 2 自分自身で反省した時に生じる気持ち。
- 3 自分が人と接する時に浮かび上がる感覚。
- 4 自分自身の中にあるしつかりとした価値観。



4 敬語に関する次の問いに答えなさい。

問1 次の空らんア～オにあてはまることばを後の1～10から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

普通語	尊敬語	謙譲語
行く	ア	参る
聞く	お聞きになる	イ
する	ウ	いたす
見る	ご覧になる	エ
思う	お思いになる	オ

- | | | | |
|----------|----------|----------|----------|
| 1 なさる | 2 おる | 3 存じ上げる | 4 おめしになる |
| 5 うけたまわる | 6 おっしゃる | 7 おいでになる | 8 いただく |
| 9 拝見する | 10 申し上げる | | |

問2 次のア～オの文に用いられている敬語に関して、使い方の正しいものと誤っているものとに分けた場合の組み合わせとして最もふさわしいものを後の1～5から一つ選び、番号で答えなさい。

- ア 長年家で飼っている犬に毎朝エサをあげる。
- イ 国語の山田先生は月一回ゴルフをなさるそうです。
- ウ 「本日は勝手ながら休業させていただきます。」とビラをはる。
- エ 私の母があなたにおっしゃりたいことがあるそうです。
- オ さっそくタクシーがお客様を迎えにまいりました。

- | | |
|-----------|---------|
| 1 正Ⅱア・ウ | 誤Ⅱイ・エ・オ |
| 2 正Ⅱイ・ウ | 誤Ⅱア・エ・オ |
| 3 正Ⅱア・イ・ウ | 誤Ⅱエ・オ |
| 4 正Ⅱイ・オ | 誤Ⅱア・ウ・エ |
| 5 正Ⅱイ・ウ・エ | 誤Ⅱア・オ |